

真の偉大さは仕えることにある

ルカ福音書22:24-30

(新改訳2017訳)

22:24 また、彼らの間で、自分たちのうちでだれが一番偉いのだろうか、という議論も起こった。

22:25 すると、イエスは彼らに言われた。「異邦人の王たちは人々を支配し、また人々に対し権威を持つ者は守護者と呼ばれています。

22:26 しかし、あなたがたは、そうであってはいけません。あなたがたの間で一番偉い人は、一番若い者のようになりなさい。上に立つ人は、給仕する者のようになりなさい。

22:27 食卓に着く人と給仕する者と、どちらが偉いでしょうか。食卓に着く人ではありませんか。しかし、わたしはあなたがたの間で、給仕する者のようにしています。

22:28 あなたがたは、わたしの様々な試練の時に、一緒に踏みとどまってくれた人たちです。

22:29 わたしの父がわたしに王権を委ねてくださったように、わたしもあなたがたに王権を委ねます。

22:30 そうしてあなたがたは、わたしの国でわたしの食卓に着いて食べたり飲んだりし、王座に着いて、イスラエルの十二の部族を治めるのです。

【祈りながら考えよう】

- (1) だれが一番偉いかという議論は、いつ起こりましたか。
- (2) レハベアム王は、誰の助言に従うべきでしたか。
- (3) 低い心はどうして得られますか。

【解 説】

(1) 受難の予告の直後に

《また、彼らの間で、自分たちのうちでだれが一番偉いのだろうか、という議論も起こった》

最後の晩餐となった過越の食事の席上で、イエスが弟子の中の1人がわたしを裏切る者になると、イスカリオテのユダのことを語られた、その直後のことである。ほとんど同じ記事が、マタイ福音書では20章に、マルコ福音書では10章にあるが、マタイ、マルコの場合は、この記事の置かれている場所がルカと違う所にある。

マルコにおいては、ゼバダイの子ヤコブとヨハネ、肉の関係ではイエスと従兄弟同士と考えられていたこの2人の弟子が《あなたが栄光をお受けになるとき、一人があなたの右に、もう一人が左に座るようにしてください》と、イエスに頼みに来た、その記事に続いている。それからマタイの方は、これに母親がついて来ている。イエスの母マリアと姉妹であった母親が、その肉の関係をたどって、息子たちを連れてイエスの所に来た。

イエスの王国が実現した時、どうかこの2人をあなたの右と左に座れるように、すなわち家来としては最高の位置に置いて下さいと、前もってお願いをしに来た。

《ほかの十人はこれを聞いて、ヤコブとヨハネに腹を立て始めた。そこで、イエスは彼ら呼び寄せて言われた》ということから、今日の所に続く。また、マタイ、マルコにおいては、イエスがエルサレム入城をなさる前のことで、この記事の置かれている位置がだいぶ違っている。

それがどういうことで違うのか、それはよく分からない。しかしその内容は同じことであって、私たちはそのイエスの教えられたこと、語られたことを理解できればよい。

共通的なことは、ルカ福音書の場合は、イエスが弟子の1人に裏切られて敵の手に渡され、十字架の死を遂げられる、そのことが予告された直後である。マルコ10章32節から読む。

《さて、一行はエルサレムに上る途上にあつた。イエスは弟子たちの先に立って行かれた。弟子たちは驚き、ついて行く人たちは恐れを覚えた。すると、イエスは再び十二人をそばに呼んで、ご自分に起ころうとしていることを話し始められた。「ご覧なさい。わたしたちはエルサレムに上って行きます。そして、人の子は、祭司長たちや律法学者たちに引き渡されます。彼らは人の子を死刑に定め、異邦人に引き渡します。異邦人は人の子を嘲り、唾をかけ、むちで打ち、殺します。しかし、人の子は三日後によみがえります。]》

主は、ご自分の受難の予告をなさった。その直後に、ゼバダイの子ヤコブとヨハネがイエスのもとにやって来たど、なっている。マタイの方もやはり同じであって、マタイ20章17節以下のところにある。

(2) 師の心弟子知らず

位置は違うが、マタイ、マルコにおいてもイエスの死が予告されたその直後のこと。ルカにおいても、イスカリオテのユダの裏切りにおいてイエスが死に渡されることが言われた直後に、その同じ席でこの24節以下の事があったということにおいては、三者共通である。

一時は、裏切り者がいるという言葉で、動揺したが、やがてユダが去った時、弟子たちの間に議論が起こった。結局弟子たちは、イエスのユダについて語られたこと、裏切りについて言われたことはよく分からなかった。またイエスが死ぬということを予告されても、そのことがよく受け取れなかった。

弟子たちの心は、イエスがこの地上において必ず栄光の国を実現なさると、そのように思い込んでいた。イエスがみじめにも人の手に渡されて、みじめな死を遂げるなどとは、毛頭考えられないことであつた。

この力あるお方、ツアラアトの人をいやし、足なえを立たせ、生まれつきの盲人の目を開けることのできるお方、まさに旧約預言者たちが預言していたメシヤの姿を見るこのお方が、どうしてそんなみじめな死を遂げられるのか。預言者が預言したように、必ずここにキリストの国をお建てになる。それをどこまでも夢見ていた。

(3) 人が集まる所に比べ合いが

《また、彼らの間で、自分たちのうちでだれが一番偉いのだろうか、という議論も起こった》

①だれが一番偉いか

彼らがお互いの間で言い争った問題は何であつたのか。自分たちの中でだれが一番偉いか、ということであつた。

これは人間共通な心の現れである。人が集まる所では、必ず比べ合いが起こる。誰が誰に何が勝っているか、何が劣っているか、どちらが偉いか、何ができるか、この比べ合い、議論が起こる。子供も、子供なりの比べ合いをする。

人間集まる所、この比べ合いのない世界はない。表面に露骨に出ているか、心の中で暗黙になされているかの違いがあるだけ。教養ある者は、教養ある者のようなあり方がある。道徳を口にする者たちは、道徳を口にする者たちのようなあり方がある。そうでない者は露骨である。宗教家の世界においてもしかり。表面は、謙遜のように装っていても、互いに譲り合っているような言葉を交わし、少しでも勝る所を見いだす時、人はそれで安心し、逆に人よりも劣った所を自分に見る時、劣等感に陥る。

②人間の進歩向上の考え

ある者は、比べ合いがあればこそ人間は向上し、進歩発展していくとして、これを肯定してきた。たしかに、そういうことも言える。国と国、民族と民族、あるいは個人と個人、互いに比べ合い競い合う。どちらが偉いかを競い合う。そこに科学は進歩し、人間の考えは進展し、様々な事が進んでくる。それが人間の築き上げていく文明というもの。

しかし、そこに人間の真の幸福というものが見いだされていくのか。文明世界というものが本当に人間を幸せにしていくものなのか。人間の真の安心はそこに見いだされていくか。そうとは決して言えない。そこには様々な悩みが起こっていく。人ごとではない。弟子たちの議論と私は全然関係ない所にいるとは言えない。残念ながら、教会の中にも互いに比べ合いがある。信仰の比べ合い、恵みを受けることの比べ合い、伝道者の中にも比べ合いがある。

(4) この世の権力者

《異邦人の王たちは人々を支配し、また人々に対し権威を持つ者は守護者と呼ばれています。しかし、あなたがたは、そうであってはいけません。あなたがたの間で一番偉い人は、一番若い者のようになりなさい。上に立つ人は、給仕する者のようになりなさい。》

①この世の国の王たちは人々を支配している

弟子たちは、キリストの御国が実現することを夢見ていた。弟子たちの中で、誰が誰よりも大いなる者であるか、ということが争われるのは、ひいてはやがて実現するキリストの御国における位置につながる。

しかし、キリストの御国はおおよそ彼らが考えていたこの世の国とは質が違う、真反対な国である、ということイエスはここで私たちに示しておられる。

この世の王は民の上にその支配をもって君臨している。《また人々に対し権威を持つ者は守護者と呼ばれています》「守護者」とは、権力をふるっている者に対する尊称である。

②あなたがたはそうであってはいけません

《しかし、あなたがたは、そうであってはいけません》

これは強い否定の言葉である。断じてそうであってはいけません。神の国は、弟子たちが考えていたようにこの世界に、この地上の権力にとって替わる権力として臨むものではない。

若い者というのは、年長者に対して席を譲り、末席に着く者である。低い所におかれる者。一番偉い者は、一番若い者のように、一番後ろにつく者、末席を願う。そこに神の国における偉い者の姿がある。より低くなる。主につく者は給仕する者のようになるべきである

(5) 国を引き裂く悪王

①長老たちの助言

旧約聖書の列王記上12章を読むと、ダビデの子ソロモンの、そのまた子供のレハベアムがソロモンのあとイスラエルの王となった。しかしこのレハベアムは、父ソロモン、あるいは祖父ダビデに比べて、まことに悪王であった。

そのやり方が酷なために、ヤラベアムという者が民の代表となって、どうか使役をゆるくして下さいと、この王に交渉した。それでレハベアムが、父のソロモンの時から仕えてきた長老たちに相談した。

その時、長老たちは王に答えた。7節《彼らは王に答えた。「今日、もしあなたがこの民のしもべとなって彼らに仕え、彼らに答えて親切なことをかけてやるなら、彼らはいつまでも、あなたのしもべとなるでしょう。」》

王が王として高い所で権力を振るうのではない。王が民のしもべとなること、しもべの心をもって民を治めること、彼らを仕えさせるのではなく、王が民に仕える者となる。

その心で親切に答えなさい。彼らの言い分を聞いてやりなさい。そうしたらいつまでも彼らはあなたのしもべとなるでしょう、と言った。

②若い家来たちの助言

ところが、レハベアムはこの答えをよしとしないで、今度は自分と子供の時からの友だちであった若い家来に聞いた。すると若い家来は、権力主義で臨むことを勧めた。民は、こちらがやさしくするとつけ上がるから、どこまでも厳しく、より強く押さえていかなければだめだ、と長老たちが教えたこととまるで逆な方向を教えた。

若いレハベアムはこれをよしとした。威張りたかった。民に頭をさげたくなかった。民の言い分など聞きたくなかった。己を高しとする者は他を受け入れることはできない。どこまでも自分の言い分を他に押しつけていこうとする。

それが己を偉くしていこうとする者の方向である。他を受けないで、自分を他に受けさせていこう、これがこの世の権力者の姿、方向である。それを教えた。それをレハベアムはよしとした。

③王国の命取り

ヤラベアムが約束の3日目にレハベアム王の所に、よき答えを得ようとしてやって来た時に、王は荒々しい態度をもって厳しく答え、若い家来から言われたような言葉をもって驚しつけた。これが王国の命取りになった。

その後、ヤラベアム（ソロモン王の家来だった）を王とする国が生まれ、イスラエルの国は大きく2つに分裂することになった。イスラエル12の部族のうち、ダビデのやからであるユダとベニヤミン、この2つの部族を残して、あとの十のやからは全部、ヤラベアムの側につき、ダビデ王朝から分裂する。そして北イスラエル王国というのがここに実現するに至った。それがやがて幾度か王朝が変わって、ついに紀元前721年、時の大国アッシリヤによって滅びるまで、元来1つであったこの国は、犬猿の仲となって、絶えず争っていくに至った。

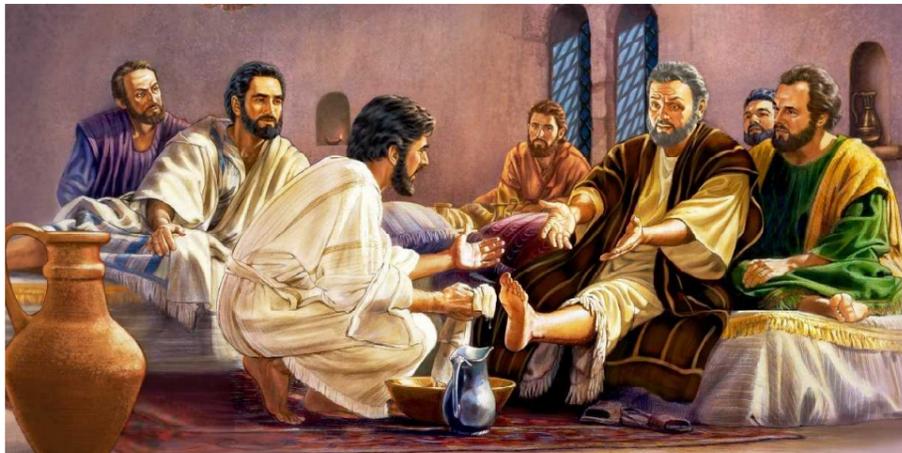
(6) イエスに洗われている

《食卓に着く人と給仕する者と、どちらが偉いでしょうか。食卓に着く人ではありませんか。しかし、わたしはあなたがたの間で、給仕する者のようにしています。》

これは、あの晩餐の席上で、弟子たちの足をお洗いになった時のことであろう。ヨハネ福音書13章を見ると、そこで主イエスが弟子たちの汚い足を洗っておられる。

サンダルを履いて、ほこりだらけの道を歩いている者たちであるから、その足は汚れている。イエスはその1人1人の足を、たらいを持ってきてお洗いになる。

その晩餐の席の着き方は、寝台の上に皆左肘をつけて横になっているから、足は後ろの方へいつている。



イエス様はその寝台の後ろの方へたらいを持って行って、足をこちらに出しなさいと言えば、足が出る。その下へたらいを持って行ってザブザブと洗って、拭きなさる。

当時、客の足を洗うのは奴隷の仕事であった。それを先生である主イエスに洗ってもらう。そんなもったいないことと、ペテロは足を引っ込めた。すると、《わたしがあなたを洗わなければ、あなたはわたしと関係ないことになります》と言われた。イエスは私たちの汚い足を洗うために来て下さった。イエスの血をもって洗うために来て下さった。この世を歩む限り、私たちは世の何かに汚れる。イエスは毎日私たちに洗って下さっておられる。

このようにして、イエスは、ご自身仕えられるべきお方でありながら、身をもって仕え、そしてお互いが仕え合っていくようにと模範を示された。それがイエスの国のあり方であり、姿であり、原理である。

(7) 試練の時に踏みとどまってくれた

《あなたがたは、わたしの様々な試練の時に、一緒に踏みとどまってくれた人たちです。わたしの父がわたしに王権を委ねてくださったように、わたしもあなたがたに王権を委ねます。そうしてあなたがたは、わたしの国でわたしの食卓に着いて食べたり飲んだりし、王座に着いて、イスラエルの十二の部族を治めるのです》

イスカリオテのユダはどこまでもこの世の方向を主張して、イエスを裏切った。自分の願う方向をもって、イエスを捨て、裏切り、敵に渡し、葬る方向に行った。試練に負けた。しかし、他の弟子たちは負けながらも、イエスから離れなかった、ということをついに試練に勝った。イエスによって勝利できた。

恵み深い主は、《わたしの様々な試練の時にも、わたしについて来てくれた》と言って、弟子たちをほめて下さった。この直前まで互いに言い争っていた弟子たちに対して、そのように告げて下さったのである。まもなく弟子たちはみな主を見捨てて逃げてしまうだろう。主は彼らの心の中を見抜いておられた。

彼らが主を愛しており、主の御名のために恥辱に耐えてきたことを知っておられた。彼らはやがて報いを受けるであろう。キリストがダビデの王座について地上を支配なさる時、彼らも《王座に着いて、イスラエルの12の部族をさばく》のである。

イエスと共に最後まで歩む者、運命を共にする者は、来たるべき神の国において、大いなる饗宴にあずかると、イエスは約束されている。またその国において、キリストと共に治める者になると言われている。千年王国の時である。

(8) 千年王国での食卓

千年王国の時の食卓はもはや、最後の晩餐の時のように、弟子たちが互いにその優位を争い合う、だれが一番偉いだろうかと、そんなことを比べ合う、あるいは暗黙のうちに隣を気にし合う、そんな食卓ではない。

そういうものから解放された、本当にただ愛において互いに仕え合う、互いに他を尊び、他をよしとしていく、そういう愛による心から打ち解けた饗宴、食卓である。

低い心、そこに真の幸いがある。人の足を洗っていく所、人に仕えていく所、そこに何という楽しみがあることか。誰にも仕えていく所に身を置くことができたら、何とそれは幸いなことか。そこに何の欲求不満があるのか。すべての恵みは主が賜る。その主の扱いの中で、主と共に仕えていく。主は仕える所におられる。

(9) 低い心は罪を認める心

①道徳では得られない低い心

低い心はどうして得られるのか。残念ながら倫理道徳教育では得られない。そこにはまた、低い心の比べ合いがある。あの人よりも私の方が心が低い。あちらの方が少し高いではないかと人を比較してしまう。

②主の光で自分の罪の深さを知っていく時

私たちが主の光に触れて、自分自身の罪の深さを知っていく時、18章の取税人の場所に立たされる。罪にまみれた自分を主の前に置いて、《神様、罪人の私をあわれんでください》と言うしかない、この罪を認めていく場所、そこにおいてこそ、初めて低い心が起こる。

ダビデがなぜあのように成功したのか。ダビデは本当に神の前に、自分の罪を認めていく人であった。大きな失敗もした。神の前に自分の罪として頭を下げていった。その罪意識が、彼をしてどこまでも低い心にさせていった。

それが民をよく治め、あのすばらしい最も拡大されたイスラエル王国を実現する、彼の支配となっていった。

③私たちが低くなる場所

私たちが低くなる場所は、自分の罪を認める場所である。神の光に照らされてこそ、自分が本当に罪深い者と思える。親に対しても、妻に対しても、隣人に対しても本当に罪深い者だ、と神の光に照らされて自分の罪を認めていく所、そこで人に対してもへりくだらざるを得ない。

自分のような者をよく親と呼んでくれる。自分のような者をよく夫と呼んでくれる。こんな者をよく妻として扱って下さると、心から自分の罪、自分の汚れ、自分の駄目さを認めて行く時、初めて誰に対しても低い心になれる。

それでこそ、主がここに言われている方向、キリストが十字架と、あの流された血潮において建てられる新しい世界、新しい国を受け継ぐ者たちの方向が与えられていく。

それ以外に、私たちがへりくだる道があるだろうか。倫理道徳で、へりくだったような格好をつけることはできる。しかし、心の中は、自分がへりくだっているということで、さらに高慢な者になってしまう。

④自分で自分の心を変えることはできない

自分で自分の罪の姿を変えることはできない。変えることのできるお方はキリストだけである。自分の罪を認めて、この罪人をあわれんで下さいと、主の前に投げ出して行く時、霊において生まれ変わった新しい自分に変えられる。

誰から何と言われようと、言われる通りの駄目な者ですと、自分の駄目さを認めて頭を下げていくところに、私たちは本当にへりくだっていくことができる。それ以外にない。

キリストの赦しの中で、お互いに赦し合っていく。それが、主が言われている新しい神の国の原理による姿である。